

木曾川



愛知県扶桑町

ふるさとの街・探訪記

木曾川の流に育まれた
自然と暮らしが息づく扶桑町

エリア・レポート

水と闘ってきた扶桑町の
歴史と現在

気ままに JOURNEY

雄大な木曾川が育む伝統文化
まちを彩る新たな文化たち

歴史ドキュメント

幾多の困難を乗り越え
完成した三川分流工事

TALK&TALK

明治改修余話

民話の小箱

光明寺流れ

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
春号は、木曾川左岸のまち、扶桑町の
川とともに歩んだ歴史を中心に、
歴史ドキュメントでは、
「明治改修」シリーズの第六編をお届けします。



ふるさとの街 探訪記

愛知県扶桑町

犬山扇状地扇頂部の町

愛知県丹羽郡扶桑町は、県の北西部に位置し、北辺は木曾川に臨み対岸は岐阜県各務原市、東は犬山市、西は江南市、南は大口町と接しています。江戸時代になってお囲堤ができるまでは木曾川の氾濫地帯でした。犬山扇状



扶桑町空撮



地の扇頂部にあたり、土壌が砂地であるため水田が少

木曾川の流れに育まれた

自然と暮らしが息づく扶桑町

ない畑作中心の地域でした。明治以降は、養蚕・生糸の集散地として栄えました。現在は名古屋へのアクセスが良いい立地条件からベッドタウンとして発展しています。

大和政権勢力の東限

扶桑町域の縄文時代の遺跡として唯一柏森地区に晩期の住居跡があり石器や土器の破片が採取されました。弥生時代の遺跡は、竹藪遺跡(柏森地区)斎藤遺跡(斎藤地区)など数カ所が

あり、ほかに単独出土の土器片などが見つかっています。町域にあつて原形をとどめている古墳は、高雄地区の長泉塚古墳と舟塚古墳の二基だけが、他の地区からも土師器、須



長泉塚古墳

恵器などが出土していることから当地には多くの古墳が造られていたようです。その多くが失われてしまった理由として、木曾川の洪水によって流失してしまったことや、川原や洲から運びあげた土砂で墳丘を造つたため脆く崩れやすかったことが挙げられます。また、こうした土砂は土質が良いため耕作地に利用されることもあつて古墳は失われていったようです。尾張地方は初期大和政権の勢力範囲の東限で、朝廷の支配地である

犬山扇状地の扇頂部に位置する扶桑町は、木曾川の流れとともに歴史を刻んできました。古代は大和朝廷の勢力下であり、鎌倉時代には承久の乱の舞台となっています。江戸幕府のキリシタン弾圧で多くの犠牲者を出した痛ましい歴史もありました。明治以降には、全国屈指の養蚕の地として知られていました。

うちもつとも確実視されているのが瀬波郡で、丹羽郡東部にあたります。県主前刀連は前刀郷にちなむもので、この郷は斎藤地区に比定され地区内に今も「県夕」「県」の地名が残っています。

荘園の盛衰と承久の乱

一〇世紀初頭から丹羽郡司を世襲するようになった良峯氏は、正暦年間(九九〇～九九五)に小弓荘(扶桑町から犬山市にかけての地域)を藤原道長に寄進するなど荘園を増やして勢力を広げていきました。一二世紀中頃には、現在の扶桑町・大口町一带と江南市南部辺りの所領一七郷を後白河法皇に寄



ふるさとの街・探訪記



悟深寺

進し稲木荘と号しました。後に、法皇は自らが建立した長講堂を護持するため莫大な荘園を長講堂領とし、稲木荘もそのなかに含まれました。

鎌倉時代になると守護・地頭による荘園支配権の篡奪がめだつようになり、特に室町時代には守護の権力が強まっています。長講堂領稲木荘も応永二〇年(一四一三)の目録では、安長郷だけが寺領となっており、他は尾張守護土岐氏一族の所領となっています。

鎌倉幕府による全国支配を決定的にしたのは、承久の乱の幕府側の勝利でした。朝廷で院政を敷いていた後鳥羽上皇が、承久三年(一二二二)執権北条義時追討の院宣を諸国に発し倒幕の兵を募ったのに対して、幕府は義時の子泰時を総大将とする大軍を西上させました。兵力で劣る上皇方は、尾張河(木曾川)を防御線と決め、ここを支えている間に西国武士の参戦を待つ作戦をとりました。このため、主戦場は尾

張河をはさんだ美濃尾張となり、右岸側(現在の美濃加茂市から*大垣市墨俣町あたりまでの広い範囲)に布陣した上皇方に対して、左岸側から鎌倉

方が攻め込む形で戦闘が行なわれました。山那・小淵の対岸の気瀬(各務原市鶴沼大伊木町)に上皇方の陣があり、少し下流には上皇方が主力を配した摩免途(各務原市前渡町)の陣もあつたので、これらを攻略するために扶桑の地にも鎌倉方の軍勢が押し寄せました。各地で激しい戦闘が行なわれましたが、結果は上皇方が総くずれとなり、鎌倉方は一気に京を制圧しました。尾張河の戦いは、武家政治を確立させた歴史的に極めて重要な戦いでした。

*当時の木曾川は、現在の境川筋で龜保付近で長良川へ合せて流下していました。

扶桑に生まれた禅僧・悟深宗頓

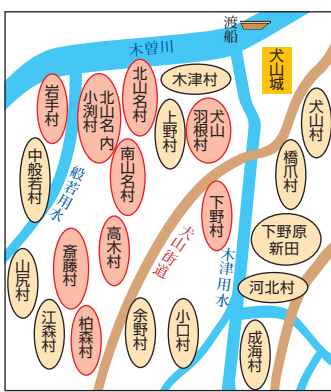
現在の扶桑町内の寺院を宗派別にみると、寺院数一五のうち一が臨済宗で、尾張の他地域に比べて際立って多いのが特徴的です。近隣の犬山市、大口町にも臨済宗寺院が多く、これは臨済宗妙心寺派の高僧・悟深宗頓によるところが大きいとされています。

応永二二年(一四一五)南山名郷(扶桑町南山名)で生まれた悟深は、幼少より小釈迦と呼ばれ、一〇歳で出家しました。犬山の瑞泉寺で日峰宗舜に師事したのを皮切りに各地で修行を重ね、京都の龍安寺の雪江禅師から「悟溪」の名を与えられています。悟深が開祖となった瑞龍寺(岐阜市寺町)は、全国から修行僧が集まり門下から優秀な僧を輩出したので、濃尾の禅文化の

中心となりました。その後、瑞泉寺や京都の妙心寺などの住職を務め、その禅風が高く評され、八二歳の時、後土御門天皇より「大興心宗禅師」の号を授かりました。生前に諡名を受けたのは悟深が最初であつたそうです。さらに没後三五〇回忌には、孝明天皇より宗門最高の荣誉とされる「仏徳広通国師」の諡名を贈られたほどの高僧でした。悟深禅師の生誕地には悟深寺が建てられ、春には見事なしだれ桜が咲き誇ります。

江戸時代の扶桑町

江戸時代当初の扶桑町域には、犬山羽根・下野・北山名・岩手・南山名・斎藤・高木・柏森の八カ村があり、『寛文村々覚書』(一七世紀中頃)に記載された各村の人口を合計すると戸数四六五戸・人口二八七七人となります。犬山城を居城とした付家老成瀬氏とその家臣の給地が最も多く、他に蔵入地藩直轄地)がありました。土壌が保水力の弱い砂地であるため、水田が少なく耕地の約八割が畑地でした。年貢は米



江戸期の扶桑町域の村

で納めるのが原則でしたが、尾張藩は畑の多い地方には麦で納める「麦成」を許していたので、当地の村も一部を麦で納めていました。

尾張のキリシタン弾圧

扶桑町・犬山市辺りは、江戸時代初期にキリスト教の信仰が広がり、禁教弾圧による犠牲者が多く出たことが知られています。濃尾地方でのキリスト教は、豊臣政権下の岐阜城主・織田秀信が洗礼を受けて城下に教会などを建てています。尾張では、領主であった織田信雄・福島正則、初代尾張藩主松平忠吉が清洲に天主堂の建設を許可し布教を許していました。こうした為政者の姿勢が尾張にキリスト教が広まる一因となりました。

扶桑地域にキリスト教が伝えられたのは比較的遅く、幕府が全国に禁教令を出した慶長一八年(一六一三)より後の、寛永年間(一六二四〜一六四三)初めとされています。尾張藩のキリシタン弾圧は寛永六年(一六二九)高木村で摘発が行なわれたのが最初といわれており、寛永八年には五七名が摘発され、処刑者のなかに高木村の住人が入っていました。寛永一四年には下野村で大検挙が行なわれた記録が残っています。

こうしたなかで行なわれた最も大規模な弾圧が「濃尾崩れ―寛文の大殉教」と呼ばれる大量摘発でした。寛文元

ふるさとの街・探訪記



薬師寺の舟型地蔵尊(中央)とブチワリ不動(左)

り、これもキリシタン遺物とされています。このほか処刑地跡と伝わっている場所として、高雄地区のランポウ山、長泉塚、斎藤地区の正覚寺、柏森地区の専修院などがあります。



恵心庵

年(一六六一)美濃国可児郡の塩村・帷子村(可児市)で二四人が捕縛されたことをきっかけに、高木村や五郎丸村(犬山市)など丹羽郡を中心に藩内各所で多数の信者が検挙されました。この弾圧は寛文七年まで続き入牢者は七〇〇名を越え半数近くが処刑され、残った者の多くも獄中で亡くなりました。

扶桑町の旧家には、キリシタン弾圧に関連した古文書が保管されており、当時の様子を知る貴重な資料となっています。また、町内には弾圧にかかわる遺跡が多く残っています。高木地区の恵心庵は、殉教跡に供養のため建立されたといわれ、山那地区の薬師寺には処刑地・地蔵畑にあったといわれる舟型地蔵尊が祀られています。この地蔵尊の隣に通称「ブチワリ不動」と呼ばれている半壊した不動明王の像があり、これもキリシタン遺物とされています。このほか処刑地跡と伝わっている場所として、高雄地区のランポウ山、長泉塚、斎藤地区の正覚寺、柏森地区の専修院などがあります。

養蚕の歴史

明治維新によって、尾張藩から分かれて犬山藩が成立すると、扶桑町域の村々も犬山藩に属し廢藩置県で犬山県となり、明治四年(一八七二)合併によって名古屋県となりました。明治二年(一八八八)の市町村制施行、明治三九年(一九〇六)の合併を経て現在の扶桑町の前身・扶桑村が誕生しました。「扶桑」の名は当時の郡長が「本村は桑園多し、ゆえに扶桑と命名したならば」と述べ名づけられたといわれています。

尾張で古くから養蚕が行われていたことは、律令制下の調として絹織物・絹糸が納められていたことから推察されます。江戸時代中頃の享保一二年(一七二七)に北山名村の庄屋が養蚕を奨め農民の収入増加をはかったという記録があり、寛政年間には、丹羽郡一帯は養蚕・絹織物地帯に位置付けられていたようです。

『尾張徇行記』の北山名村・南山名村・斎藤村・高木村・



昭和40年頃の養蚕の様子



桑園風景

柏森村の記述に桑、蚕が出ています。

明治になって蚕の飼育方法が改良されると、収繭量が増加し農家の重要な収入源となっていきました。それまで蚕は居間や物置で飼育していましたが、温度・湿度を調節する専用の部屋を持った大きな住宅が作られるようになったのが明治三〇年代からです。

江戸時代には畑のまわりに植えられていた桑の木もいつしか畑の主役となり、明治二八年頃の桑園分布図を見ると東部の水田地帯以外は一面桑園となっています。

養蚕の最盛期は昭和五年、村の農家の九〇%が養蚕農家で、生産量は土地面積比では全国一位でした。また、昭和六年には市町村別繭生産量で県内一位になっています。

その後、養蚕業は第二次世界大戦で大きな打撃を受け、戦後も復興に努力しましたが、化学繊維の発達などによって次第に衰退し、現在では扶桑町で養蚕を営む農家は無くなりました。

暮らした町・扶桑を目指して

昭和二十七年(一九五二)、扶桑村は町制施行によって扶桑町となりました。当時の人口は約一万人でしたが、昭和四〇年代に名古屋のベッドタウンとして急激に人口が増加し、昭和四九年(一九七四)には二万五千人を超えました。住宅団地の建設は名鉄犬山線の沿線から始まり、主要地方道一宮犬山線



現在の扶桑町

沿いへと拡大し、他の地域にも広がりました。かつて見渡すかぎり桑畑が広がっていた扶桑の景観は、住宅が立ち並び、道路が整備された都市景観に変わりました。最近では、幹線道路沿いに飲食店などの店舗が並び、大型ショッピングセンターが相次いで進出するなど商業地としても発展しています。都市化の進行によって、行政サービスにも「暮らした町」が求められるようになった扶桑町では、「自然と生活が息づくアメニティタウンふそうの創造」をテーマに、自然と人のよりよい共生空間の実現をめざして、自然、社会、経済、文化の調和のとれた地域づくりをめざしています。

参考文献

- 『扶桑町史』 上・下巻 平成一〇年
- 『犬山市史』 通史編上 平成九年
- 『愛知県の地名』 平凡社 一九八一年
- 『ふそう まるごと 50年』 町勢要覧 二〇一二年



木曾川山那付近の風景(上流より)

AREA REPORT

愛知県扶桑町

水と闘ってきた扶桑町の歴史と現在

木曾川に面した扶桑の地に暮らす人々は、たえず水害と闘いながら生きてきました。江戸時代にお囲堤ができてからは、用水の確保に苦勞した歴史を持っています。そして今でも、町を水害から守る努力は絶えることなく続いています。

扶桑町の伝承にみる木曾川氾濫

扶桑町山那地区には「山那切れ」と呼ばれる堤防決壊にまつわる伝承が多く残っています。「水かさが増した木曾川の濁流のなかを怪物が通り過ぎるのを見たら、堤が切れて家や畑が一面濁水につかった」といったたぐいの話で、今号の「民話の小箱」に掲載している「光明寺流れ」も「山那切れ」にまつわる話です。過去に幾度となく山那付近の堤防が決壊していたことがわかります。南西方向に流れてきた木曾川が犬山西部付近から西向きに流れを変えるため、湾曲部の外側にあたる扶桑町山那・小淵一带は流れが強くあたり堤防が決壊しやすい場所だったのです。また、お囲堤が築造される以前の木曾川は平野部に入って左岸の尾張側に一の枝川、二の枝川などの支流を派生し、その支流がさらに枝分かれして網の目状に流下していました。山那という地名の起源は、「木曾川の洲に築場があったことに由来」とするのが通説



山那神社

ですが、南山名の山那神社由緒書には、「…木曾川に堤防なき時代に水は蜘蛛手の如く流れ当地方にて八原野を形成しその八野の音便上ヤナに転訛せる説信なり」と書かれているそうで、真偽はともかく往時の地形をよく物語っています。木曾川洪水の際には、これら中小河川も氾濫して大きな被害を出してきました。

水害にまつわる伝承としては小淵地区に「やろか水」の話が伝わっています。「やろか水」は木曾川流域の各地に残っており、大筋としては、洪水の時、川上から「やろか〜やろか〜」と呼びかける不気味な声があるので、

恐怖に耐えきれず「よこさば、よこせ」と答えると濁流が怒涛のように押し寄せ堤を壊してしまふ、という話です。怪物や悪霊の呼びかけに答えることを禁忌とする話は伝承によく見られるパターンで、『西遊記』の金角銀角のくだりや『耳なし芳二』など世界中に存在します。洪水のたびに被害を受けた木曾川沿いの人々は、荒れ狂う濁流の音を怪物の声として畏怖し、こうした伝承を生んだのでしょうか。

記録に残っている災害だけでも、最も古い記録では宝亀六年(七七五)、木曾川の河道が変わった天正一四年(一五八六)の大洪水、慶長元年(一五九六)、お囲堤の築造の要因と言われる慶長一二年(一六〇七)の洪水など列挙に限りがありません。

お囲堤と般若元杖

慶長一四年(一六〇九)尾張藩のお囲堤築造でこの地域の洪水氾濫による被害は大きく減少しました。しかし、堤によって木曾川の支流が全て締

AREA REPORT



般若元杖跡

います。当時の日本では、取水の取入口は小河川に小さな元杖を設けたものがほとんどで、木曾川のような大河から直接

取入ります。当時の日本では、取水の取入口は小河川に小さな元杖を設けたものがほとんどで、木曾川のような大河から直接

お囲堤は、犬山から弥富付近



岩手村塚

め切られたため、これら支流から引水していた丹羽郡・葉栗郡の村々はたちまち水乏地となりました。尾張藩では、築堤と同時にこれまでに耕作されていた水田の用水確保と新たな水田開発用に大規模な用水開発に着手しました。

最初に開削されたのは、岩手村(扶桑町小淵)の般若元杖から取水する般若用水で、慶長一三年(一六〇八)元杖を築造、元和五年(一六一九)導水路が完成しています。

『宮田用水史』によると「般若杖は尾張最古の元杖で、上は丹羽郡南山名より同郡浅野に至る三十ヶ村(中略)を灌漑する尾張平野中樞幹流…」とあり、また元杖の大きさについて「長二十四間、幅二間、高一間(長さ四三二m、幅三・六m、高さ一・八m)」と記されています。



改築中の木津用水

取水することは画期的でした。元杖の築造にあたっては、この地方には建造方法を知る技術者がいなかったため、一宮・真清田神社の工匠原田六助・与衛門兄弟が播磨・大和に派遣され技術を学んできたといわれています。

この般若元杖は寛永一一年(一六三四)に大水によって壊れたので約七〇m上流扶桑緑地公園内にある元杖跡に造り替えられ、その後土砂の堆積によって取水が困難となったため元文五年(一七四〇)元杖は廃され木津用水より分水されることとなりました。

般若用水のほか、扶桑町域を潤した用水には、木津村(犬山市木津)の元杖から取水した木津用水とそこから分流する下野用水がありました。また、高木村入鹿新田は入鹿池を水源とする入鹿用水によって開発された新田とされています。

お囲堤は、犬山から弥富付近



宮田用水頭首竣工記念碑

鹿ノ子島・草井(いずれも江南市・小淵(扶桑町)と順次上流に移されました。この碑は昭和二十六年(一九五二)に造られた小淵樋門の完成を記念したものです。

こうした用水のネットワークが犬山扇状地の隅々まで行き届くには、お囲堤築造から約一世紀の年月を要しました。現在では、木曾川からの取水口は昭和三十七年(一九六二)に造られた犬山頭首工にまとめられて濃尾用水と総称され、水路も改修されていますが、江戸時代に作られた基本的なネットワークは今も受け継がれています。

お囲堤以後の水害

お囲堤によって木曾川の氾濫被害が少なくなつたといえ、全くなくなつたわけではなく、寛永六年(一六二九)の洪水で山那龍泉寺、小淵薬師寺などが流失し、慶安三年(一六五〇)には木曾川流域で死者三千人を出した大洪水があつてお囲堤の補修が行なわれています。

まで続く連続堤で尾張藩領のほとんどを堤内としましたが、なかには堤外に残されたところもありました。扶桑町の北西端にあった岩手村もその一つで、『寛文村々覚書』に「畑七反五畝(一歩)」とある小さな村ながら神社や寺もありましたが、村人が水害から逃れて堤内に移住したため明治初年の調査では無住の村となっています。現在も住人はなく村の中心であつたとみられるところに塚がありイロハモミジの大木が茂っています。周囲は畑で、一部が扶桑緑地公園になっています。

この地方を襲った大災害として今も語り継がれているのが幕末に起こった「入鹿切れ」です。入鹿池(犬山市)は、香川県の満濃池について全国二番目の規模を誇る人工ため池で、尾張北部を潤す農業用水の水源です。築造は寛永

AREA REPORT

一〇年(一六三三)で、小牧村の江崎善左衛門ら入鹿六人衆といわれた人達が尾張藩主徳川義直の許可を得て工事を行いました。水の堰止めに苦勞し、河内国からため池工事に練達した河内屋三左衛門らを招いて完成させたため、堰堤は河内屋堤と呼ばれました。池の完成とともに入鹿用水、幼川用水などの幹線水路が開かれ、以後、尾張北部の用水ネットワークの一部として重要な役割を担っていきます。

その河内屋堤が決壊したのが慶応四年(一八六八)、四月中旬から続いた長雨で満水となった池は五月一四日とうとう堤防を壊し怒涛の流れが下流を直撃、北尾張一帯が水につかり、被害は丹羽・春日井・中島・海東の四郡一三三方村におよび死者九四一人、流没耕地約八四〇〇haにのぼる大災害となりました。扶桑町域でも木津用水を越えた濁流によって高木、柏森、斎藤などの村々が水につかりました。



入鹿池決壊の供養塔(入鹿池)

現在の治水対策

明治以降は、破堤などの大きな水害は少なくなりましたが、台風や集中豪雨による床上・床下浸水、田畑・道路の冠水などの被害が起こっています。特に近年は、都市化が進み、建物や道路・駐車場などの舗装面が増え、田畑や緑地が少なくなったことで、地下に浸透できない雨水が一時に側溝に流れ込み、排水能力を超えた水が地盤の低い地域であふれて浸水被害を招くようになってきました。

最近では、平成三年の台風一八号、平成一二年の東海豪雨などで大きな被害が出ていますが、他にも小規模な浸水はたびたび起こっていました。人口が増え住宅が密集する現在では、いったん浸水が起きると、農村だった頃に比べより大きな被害



中島調整池



浸水被害(平成3年)

が出るようになってきました。

扶桑町の雨水は、用水路などを通して合瀬川や五条川とその支川・青木川などに流入し、その流末は新川に合流しています。愛知県・関係市町・国土交通省は、新川流域全体で都市型の浸水被害を軽減するため、「新川流域総合治水対策」として排水施設や調節池の整備を進めています。その一環として扶桑町には高雄調節池、中島調節池が造られ合わせて約五二〇〇m³の貯留ができるようになってきました。

宅地開発事業等に関する指導要綱に基づき設置された雨水対策施設に加えて、町独自の対策もいくつか実施されています。昭和五九年(一九八四)から道路の下や、役場・学校などの公共施設に「雨水貯留浸透施設」の建設を始め、雨水をいったん溜めることで排水施設にかかる負荷を軽減するようにしています。平成一九年三月末時点までに整備された流域対策量は、公共・民間施設合わせて約五八〇〇〇m³です。



雨水貯留施設

住民と一体となった対策として、住宅や店舗などに、屋根に降った雨水を雨樋で集めて効率よく地下に浸透させる「雨水浸透枳」の設置を呼びかけ、設

置にあたっては補助金を交付しています。また、水田の埋め立てによって、従来水田が持っていた保水・遊水機能が失われてきたことも浸水被害が増えてきた要因と考えられるため、残っている水田の所有者に不要不急の埋め立てをしないようお願いする「水田埋立防止協力制度」を設け協力を交付しています。雨水の地下浸透は、浸水被害の軽減だけでなく、地下水涵養による地盤沈下の防止や、地球温暖化防止にも効果があると考えられています。

かつて木曾川とその支流の氾濫になやまされ、お囲堤の完成後は一転して水確保に腐心してきた水との闘いは、都市化する地域における水のコントロールという形で現在も続いています。

参考文献

- 『扶桑町史』上・下巻 平成一〇年
- 『新編宮田用水史』宮田用水土地改良区 一九八八年
- 『事業のあらまし』愛知県河川工事事務所 二〇〇七年
- 『ふそう まるごと 50年』町勢要覧 二〇二二年



「雨水浸透枳」の設置PR活動

雄大な木曾川が育む伝統文化

まちを彩る新たな文化たち

山々にそって流れてきた木曾川が、はじめて平地にたどり着くところ。そこが愛知県扶桑町です。幾度となく洪水に見舞われながらも、川からの恵みはこの地に歴史と文化の種を運びました。はたしてどのように芽吹き、育まれてきたのでしょうか？ うららかな春の風とともに、扶桑の町へ出かけてみましょう。

扶桑に咲くつまおり傘

国道四一号を利用して北へ。うっすらとかすむ空の向こうに、緑の山並みが見えてきたら、そこは扶桑町です。

扶桑はその名の通り、養蚕業で賑わっていた町です。今は名古屋市のベッドタウンとして新しいマンションやマイホームが立ち並んでいます。そんな家並みの中にも過日と思わせる桑の木がちらほらと見えます。養蚕が盛んであった明治から戦前にかけて、この一帯は見渡す限り桑畑が広がっていたそうです。そんな扶桑町を代表する地場産業のひとつが「つまおり傘」



尾関浩一さん

です。竹と和紙でつくられる和傘は、開けば大輪の花のよう美しい。昔は公家や僧侶など位の高い人々の日よけのために使われていたようで、今はお茶会で野点をずるときなどに用いられています。

四百年以上、一四代にわたり製作を続けている山那地区の尾関家では、今なお伝統の技法が守り継がれています。一四代目の当主尾関浩一さんは、「昔、お宮の神官さんが、内職として傘づくりをしていたことがあったそうです。それがやがて家業として成り立っていったという話を聞いたことがあります」。なるほど、製作所のすぐ裏手には山那神社があり、「主人が話されるエピソードに時代の営みを感じることができました。現在は傘を新しくつくるほかに、何一〇年も前につくられた傘を修理してほしいと、全国から依頼がくるそうです。その多くは尾関家でつく

られたもの。「私の曾祖父がつくった傘を修理することもあり、その精緻な作りに学ぶことも多いです」

傘づくりは先代から、その先代はさらに先代から手取り足取りで教わってきたため、傘づくりの由来や造作についての意味などが、特別に記録されたものは少ないそうです。しかし、代々培われてきた技法や品質は今も受け継がれ、匠の技をひと目見ようと国内はもとより、外国の人もこの製作所を訪れています。

憩いをもたらす野鳥と花々

尾関さんに別れを告げて木曾川の堤防を上っていくと、河川敷に広がっていたのは木曾川扶桑緑地公園です。美しい木や花に囲まれた遊歩道を、颯爽とウォーキングする人たちが。広いグラ



カワセミ

ンドからは草野球の応援合戦も聞こえ、町の人たちはみな思い思いに憩いのときを過ごしています。

この緑地公園は



扶桑緑地公園

ボードウオッチングの穴場的なスポーツです。豊かな自然に集まってくる野鳥たちを眺めようと、双眼鏡やカメラを片手に足を運ぶ人も多いようです。野鳥が羽根を休め、銀輪を描く木曾川の川面。この穏やかな光景もまた、川の恵みがもたらしたものと言えるでしょう。

強く根づいた守口大根

いにしえのころより木曾川に育まれてきた扶桑町の土は、良質な砂質大地。その大地を利用してつくられているのが扶桑町の名産品、守口大根です。江戸時代には中国より伝わり、すでに三百年以上の歴史を持つ大根で、江戸時代にはお漬物が大名に献上されていたほどの逸品です。細く

扶桑町の歳時記

◆おんからかみ◆

毎年7月第3日曜日

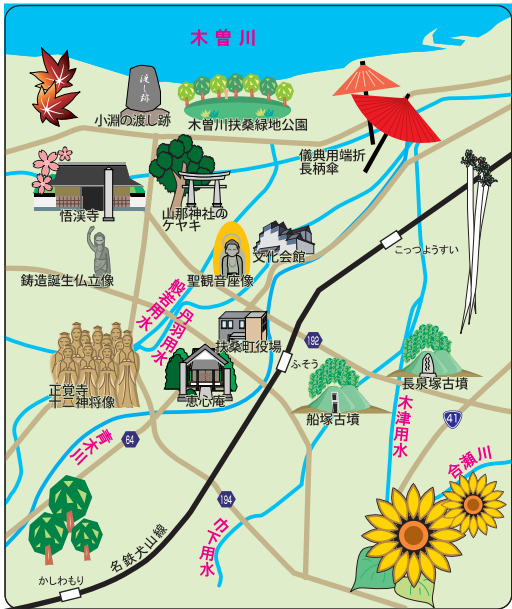
「おんからかみ」の名前の由来は、「虫送り」「うんか送り」がなまったもの。夏の厄病除けとして、江戸時代からこの地域に伝わる夏の虫送り神事です。笹竹で作られた畳一畳ほどの船に、平実盛・お姫様・船頭を意味する三体のわら人形を乗せ、子どもたちが地区内を曳いて回ります。「おんからかみの送りヨ～、おんからかみの送りヨ～」。子どもたちの元気なかけ声と一緒に、太鼓や鐘の音が鳴り響きます。各家々の前では、厄払いの意味で「かや」が焚かれ、子どもたちは手に持った笹竹で火を消しながら歩きます。



【開催場所】小淵地区の神明社 扶桑町無形文化財指定

◆神楽囃子◆

神楽囃子は古くから伝承されてきた行事です。神社の祭りに獅子舞とともに奉納されたり、獅子屋形を曳いて地区中を練り歩いたりするとき「みちゆき」という曲を笛・太鼓で演奏するものでした。扶桑町を代表する伝統芸能でしたが、後継者問題で存続が難しくなりました。しかし、昭和45年頃、高雄地区に保存会がつけられたことをきっかけに、各地区で次々と保存会を結成。昭和59年度には、ふるさとに伝わる古典芸能の復活・伝承を目的として、扶桑町神楽囃子保存会が結成されました。子どもたちは定期的に囃子の練習をして、地区の祭礼などに参加し発表しています。



交通のご案内

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋 国道41号・県道192号(約60分)

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

新名古屋駅 名鉄犬山線(約35分) 扶桑駅

お問い合わせ

◆扶桑町役場◆

〒480-0102 愛知県丹羽郡扶桑町大字高雄字天道330
TEL 0587-93-1111 <http://www.town.fuso.aichi.jp/>

扶桑町

扶桑駅

収穫された大根は、塩漬けと粕漬けという作業を繰り返し、二年余りで銚子の漬物に。その香しい風味と歯ごたえは、まさに絶品。今でも多くの人々に愛されています。

町民が主役の文化会館

伝統工芸と名産品を創造してきた扶桑町は、これからも



文化会館

てくれまして。「オープン当初はボランティアによる活動が十分に理解されておらず、不思議な団体と思われることもありましたね(笑)。しかし、数々の公演をお手伝いするうちに興味を持



守口大根の収穫

て長い守口大根は、見た目の珍しさはもちろん、漬物でしか味わうことができないという変わり種で、全国の生産量の約六五%がこの扶桑町でつくられています。名前の由来は、大阪府の守口市付近で最初に栽培されたという説と、最初に栽培した人物の名が、守口という説があります。

独自の文化や暮らしのありかたを生み出していこうと、行政と町民が一体となつてさまざまな活動に取り組んでいます。そのひとつが町の文化発信のシンボル、扶桑文化会館で行われるイベントの企画と運営です。一九九四年の開館と同じくして、町民を中心にボランティアスタッフを募り、「ふそう文化夢応援団」が結成されました。町の人たちが気軽に芸術文化活動を楽しめるようにと、約八〇名の有志が集まったそうです。

応援団のリーダー、上松さんは結成当時を懐かしそうに振り返り、こう語つてくれました。「オープン当初は

悟溪寺のしだれ桜

散策の最後は悟溪寺へ。ここは鎌倉時代の高名な禅僧、悟溪宗頓の生誕地。春には美しいしだれ桜が見られることでも有名です。

つ方も増え、今では生涯学習の一つの場として参加されている方もいるんですよ」

文化会館のロビーにはこれまで行われた公演の手書き看板がズラリ。「松竹大歌舞伎」や「春風亭小朝 独演会」「野村万作・萬歳狂言の会」など、面白そうな題目ばかりです。こうした著名人を招く一方、自主企画事業にも力を入れ、地元のアート家とともに成長していく気運も盛り上がっています。



夢応援団の活動風景

宗頓が取り組んだ禅宗の精神は、水墨画などの芸術にも垣間見られ、濃尾周辺の文化にも大きな影響を与えたと考えられます。

木曾川に育まれてきた文化を大切に、また新たな文化を創造していこうとする扶桑の人びと。それらに思いを馳せて眺めるしだれ桜は、より一段と艶やかに見えました。



悟溪寺のしだれ桜

明治改修

第六編

幾多の困難を乗り越え

完成した三川分流工事

明治二〇年に始まった明治改修では、濃尾大地震や日清戦争、相次ぐ水害などの困難に直面し、当初の事業予算と工期を大きく上回りましたが、明治三十三年に三川の完全分流を成し遂げました。

濃尾大地震による被害発生

明治二四年（一八九二）一〇月二八日六時三十分、我が国の内陸地震として最大級の濃尾大地震が発生しました。根尾村（本巣市根尾）の水鳥では高低差約六mの大断層ができるなど、福井県境から愛知県境まで岐阜県西部を縦断して約八〇kmにわたり断層のずれを地表に出現させました。

この地震による被害は、岐阜県・愛知県を中心にして倒壊家屋一四万戸以上、死者七千人以上にのぼり、岐阜県の長良川では堤防が崩れ、橋梁が倒壊しました。また、揖斐川の上流山地では多数の山崩れが発生する大災害となりました。

木曾川改修工事に対する影響も少なくありませんでした。工事の大部分が土堤防でしたが、完成した堤防に亀裂や変形が発生し修復が必要でした。完成していた木曾川導水堤（導流堤）で

は、石堤の部分で沈降や変形が発生し、その復旧のため四万円の費用と、明治二六年度（一八九三）までの歳月を必要としました。

| | 木曾川 | 長良川 | 揖斐川 |
|--------|---|---|---|
| 計画高水流量 | 立方尺/秒 264,000 m ³ /sec (約7,350) | 立方尺/秒 150,000 m ³ /sec (約4,170) | 立方尺/秒 150,000 m ³ /sec (約4,170) |
| 計画低水流量 | 立方尺/秒 4,380 m ³ /sec (約122) | 立方尺/秒 3,380 m ³ /sec (約94) | 立方尺/秒 2,140 m ³ /sec (約60) |
| 川幅 | m 300~480 (545~873) | m 240~260 (436~473) | m 150~190 (273~345) |
| 低水路幅尺 | 尺 450~1,200 (136~364) | 尺 400~730 (121~221) | 尺 200~730 (61~221) |
| 低水水深 | 尺 4~5 (1.2~1.5) | 尺 4~6 (1.2~1.8) | 尺 3~6 (0.9~1.8) |

明治改修計画諸元表

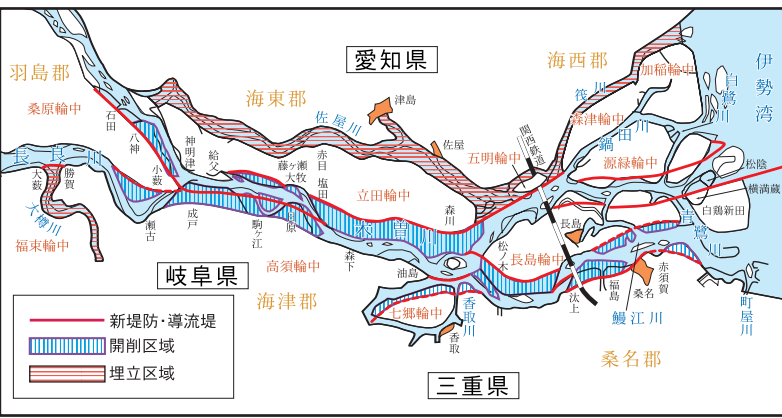
この未曾有の地震災害のために、順調に進捗してきた改修工事も中断し、しばらくは災害復旧に専念することになりました。さらに、木曾川や長良川の新河道開削のための土地の取得も大幅に遅延し、工事工程に大きな影響を与えました。また、この大震災の影響から抜けきれない明治二七年（一八九四）には、日清戦争が始まり国政は軍事が優先され、これらの影響は、後に、改修事業費の増額と工期の延伸変更となって現われました。

立田輪中の開削

明治二六年（一八九三）になって、ようやく新木曾川の河道を作るために立田輪中の塩田（愛西市塩田町）から船頭平（愛西市立田町）までの約八kmの区間で開削工事が始まりました。その上流の給父（愛西市給父町）から下大牧（愛西市下大牧町）までの開削を含めると、その掘削量は、約二百五〇万m³にのぼりましたが、明治二八年度末（一八九五）までに、約三七%が進捗していました。

給父から下大牧までの区間は、従来の木曾川の川幅が広げられる程度の小規模な開削でしたが、塩田から下流は、高須輪中の新長良川の開削に次ぐ大規模な開削区間でした。

この区間の従来の木曾川河道は、三川分離によって新しく誕生する長良川河道として使用するため、新木曾川の川幅として必要な区域が開削されて新木曾川の河道が作られ、その左岸側には、新たな木曾川堤防が築かれました。



長良川分離のための河道開削位置図

掘削された輪中の土の大部分は、新しい木曾川の左岸堤防の築堤用の土として使用されました。また、従来の木曾川左岸堤防の役目を果たしていた立田輪中は、木曾川の右岸堤防、すな

歴史ドキュメント



小藪の長良川締切堤(成戸・小藪間締切堤部分)下流側より

町)までの開削工事が始まり

が、明治二七年(一八九四)には、新長良川河道を作るための高須輪中の開削工事が始められました。これまで長良川は、小藪(羽島市桑原町)の南端で木曾川に合流していましたが、木曾川と分離して、海域まで新しい長良川を作る三川分流の要の工事です。

八神(羽島市桑原町)と小藪(羽島市桑原町)における木曾川と長良川の、新しい河道づくりのための部分的な開削と、新堤防の築造開始に並行して、長良川の新河道を作るために、高須輪中の成戸(海津市海津町)から日原(海津市海津町)までの開削工事が始まり

が、明治二七年(一八九四)には、新長良川河道を作るための高須輪中の開削工事が始められました。これまで長良川は、小藪(羽島市桑原町)の南端で木曾川に合流していましたが、木曾川と分離して、海域まで新しい長良川を作る三川分流の要の工事です。



木曾長良背割堤(塩田・日原間締切堤部分)下流側より

新長良川河道の造成

わち木曾長良背割堤として使用されることになりました。この開削区間の上流端の地形は、現在でも地形図上にも愛知・岐阜県境として存在し、干潮時には、木曾川の川底に杭や捨石が現われ、旧輪中堤の跡を偲ぶことが出来ます。

良川河道を作り、塩田(愛西市塩田町)地先の従来の木曾川河道に接続させて、新長良川とするための工事です。



干潮時の木曾川塩田地先に出現する旧木曾川河道跡

その区間の延長は、約六kmで、掘削土砂量は、約四百八〇万m³に及ぶ膨大なものです。しかも、築堤用土として利用される土砂量は、約百二〇万m³でしたから、全体量の約七四%にあたる約三百六〇万m³は土砂量は、輪中内の沼沢等を埋立てる計画でしたが、土地所有者の同意が得られず工事が停滞していました。しかし、明治二九年(一八九六)の大洪水による浸水被害後、宅地のかさ上げ用の土砂として需要が増大するなどにより順調に進捗しました。

このために、長島輪中の松ノ木(桑名市長島町)から千倉(桑名市長島町)まで、および大島(桑名市長島町)附近を開削して新長良川を作り、一方では、汰上(桑名市)から福島(桑名市)までと赤須賀(桑名市)の一部を開削して揖斐川の河道を確保しました。長島輪中の開削・築堤は、明治三〇年(一八九七)、揖斐川の開削は明治三一年(一八九八)に開始されましたが、明治十三年(一九〇〇)初頭には約三八%が進捗し、木曾・長良・揖斐の三川の分離に必要な河道がほぼ完成していました。

長島輪中の開削

宝暦治水における最大の難工事として知られている油島締切堤は、木曾川と揖斐川を分離する締切堤でしたが、明治改修では長良川と揖斐川を分離する堤防として計画されました。従来の揖斐川は、油島締切堤から河口まで、曲がりくねって流れていましたが、明治改修では、これを整理して新長良川を並行して流すことが計画さ

工期の延伸と河川法制定

日清戦争が終わった明治二八年(一八九五)の年度末における新河道開削量(しゅんせつ量)は、約百万m³で全体量の約二三%に過ぎませんでした。が、支出した費用は国費で計画額の約九〇%に達していました。この原因は、濃尾大地震と日清戦争による物価の高騰によるものですが、濃尾大地震によ



長良川左岸堤防(松ノ木・船頭平間締切堤部分)下流側より



長良川右岸堤防(大樽川締切部分)下流側より

る揖斐川筋の土砂流出は著しく、揖斐川の河床を河口域まで上昇させたため、計画低水位を維持するためには大幅な計画変更が必要となりました。このため、当初計画には組み込まれていなかった船頭平間門や揖斐川導流堤などを組み入れて、明治二九年三月に、工期を明治三八年(一九〇五)に延伸するとともに、予算額を八百三十九万二千三百四十三圓三〇銭一厘に変更しました。

この河川法の制定により、従来県によって施行してきた築堤工事は、国によって施工が可能となったため、明治三〇年度から岐阜県・三重県に属する堤防工事は国によって施工することになりました。

三川分流工事成功式

また、明治二十七年（一八九四）一〇月には、内務省土木監督署制が改正されて、名古屋に第四区土木監督署が新設されました。明治一七年に、デ・レーケの指導を受けて木曾川改修計画を作成した佐伯敦崇が初代署長として着任しました。

分流を直前にして相次ぐ水害

濃尾大地震以降も、明治二六年長良川、明治一八年長良川・揖斐川と水害が発生しましたが、明治二九年七月十二日と九月七日の二回にわたって、西濃地方を中心に大水害が発生しました。

七月では西濃地方は、加納・森部・牧の三輪中を残してすべてが水没し、大垣城天守の石垣も水没しました。この復旧工事の最中の九月には、七月を上回る洪水により一市二郡六百四八町村が浸水し、被害家屋は二万戸にのぼりました。

翌年の明治三〇年九月には木曾川で大洪水が発生し、締切り直前の状態にあった佐屋川にも洪水が流れ込み、「鵜多須切れ」と呼ばれた大災害を引き起こしました。九



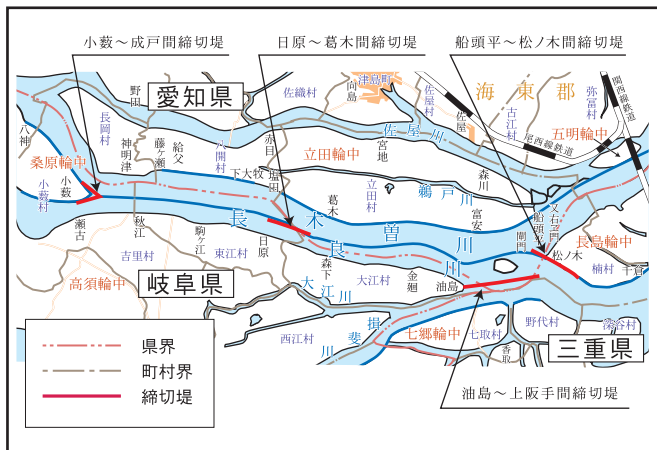
大垣城の石垣に刻まれた明治29年洪水氾濫水位



海津市平田公園の明治29年洪水氾濫水位標識



鵜多須附近の佐屋川河道跡 下流側より



締切堤位置図

月三〇日七時三〇分頃、八開村鵜多須地先の左岸堤防が破堤し、濁流は十四山村にまで達し、被害家屋は七千五百戸に及びました。

締切堤防に着手 三川分流へ

新木曾川や新長良川のための河道開削の進捗に併せて、三川分流の仕上げとして旧河道の締切工事が始まりました。明治三年（一八九九）一月には、長良川が木曾川に合流していた成戸・小藪の間で旧長良川河道が締切られ、次いで日原・塩田の間で旧木曾川河道を締切り、成戸から船頭平までの木曾長良背割堤を完成させました。

油島締切堤附近では、松ノ木・船頭平の間で新木曾川と新長良川を遮断す

る旧木曾川河道の締切りが行なわれ、ここに長良川は木曾川と完全に分離されました。

明治三年二月には、宝曆治水以降維持されてきた油島締切堤を締切り揖斐川と長良川を分離して、待望の三川分流が完成しました。

また、木曾川の佐屋川・逆川、長良川の中須川・中村川・大樽川などの支川は、その周辺の堤防工事の際に、締切られ周辺と一体の連続堤防として作られました。

明治二年には、三川の舟運路を確保するための船頭平閘門建設が開始を始め、その後、新河道や背割堤などの維持工事が国によって開始されました。

そのほか、揖斐川の修築など約二百四〇万円の工事が残っていました。明治三年三月には、木曾・長良・揖斐三川を分流させるために必要な最小限の工事が完成しました。



長良川締切堤の木曾川側 (成戸・小藪間締切堤部分) 下流側より



松ノ木・船頭平間の旧木曾川河道 長良川側より

明治三年（一九〇〇）四月二日、三川分流を祝う「三川分流成功式」が、かつての木曾川と長良川の合流点である成戸の締切堤防上で行なわれました。式典には、着工時には内務大臣として多度山頂から着工を指揮した山県有朋内閣総理大臣も臨席しました。しかし、デ・レーケの姿は、着工時と同様に、ここにも見ることが出来ませんでした。

また、この日、木曾三川分流工事の先駆けと伝えられている薩摩藩御手伝普請の偉業を顕彰する「宝曆治水顕彰碑」の建碑式が油島締切堤で行われ、成功式を終えた山県内閣総理大臣は、長良川を下りこの式典に臨みました。

これは、明治三年一〇月、元内務省土木局長西村捨三らの三川分流成功式の打合会に、かねてから宝曆治水顕彰に奔走していた多度村（桑名市）の西田喜兵衛が訪れ、宝曆治水顕彰碑建立への協力を依頼したところ、出席者全員が賛同し、三川分流成功式の一環として宝曆治水顕彰碑の建碑式を行なうこととなったと伝えられています。

参考文献

- 『木曾川改修工事概要』 明治四四年一月 内務省名古屋土木出張所
- 『木曾川改修工事』 大正八年一〇月 内務省土木局
- 『岐阜県治水史』 昭和二八年 岐阜県
- 『愛知県災害誌』 昭和四五年三月 愛知県



明治改修余話

岐阜女子大学地域文化研究所長

丸山 幸太郎 氏



丸山 幸太郎 氏

岐阜大学史学科卒、県歴史資料館長、岐阜市明德小学校長を経て現在岐阜女子大学文化創造学部教授、同大地域文化研究所長。主な著書：「幕藩制解体過程の農村」、「古田織部」、「日本農書全集第一期八巻」及び「同二期八巻」、「岐阜県史」、「岐阜市史」、「揖斐川町史」、「池田町史」、「南濃町史」、「平田町史」、「輪之内町史」、「恵那市史」、「宮村史」、「神岡町史」、「上矢作町史」岐阜の観光と食文化「ぬくもりの岐阜地名」等他、多数。

改修の結果

木曾三川下流改修いわゆる明治改修は、明治二〇年（一八八七）着手して同三三年に主要工事の三川完全分流工事を竣工し、同四五年（一九一三）にすべての工事を終えた。この近代工法を導入した下流改修は、木曾三川治水史上最大にして画期的・抜本的な工事で、相次ぐ水害や排水に悩まされてきた流域住民の水害問題を根本的に解決するものであった。

三川分流が成った明治三三年（一九〇〇）以前と以降では、輪中地帯の水害の大幅な減少とともに、水稲の反収量と収穫高増加及び耕地拡大が見られ安定した農業生産が展開されるようになった。



明治改修・三川分流碑

うになったのである。その統計的な数値の変化については、当誌一九九五年夏号（2015）『明治改修の成果と影響』等に見る通りである。

改修を実現させたもの

近代治水の木曾三川下流改修を実現させたものは何かについて、次のようなものが挙げられる。

- (一)明治政府の意気込み
- (二)県官の建言
- (三)地元民の要望活動

この三つがあいまってであることは言うまでもないが、その重みからするとこの順序であった、と言わざるをえない。

明治新政府は、出発時、最大の懸案は、関税自主権のない不平等条約の改正であった。そのため、富国強兵・殖産興業の二大政策を掲げて実行し、国力をつけて、各国に働きかけようとした。そのため、産業を振興し、水運・陸運を整備して流通を良くし、貿易を盛んにする必要に迫られた。

政府は、明治五年二月、オランダの土木技師ファン・ドールンを、翌年にはデ・レーケなどオランダ人技師を相次いで多数招聘・雇用して、先ず築港の計画や指揮に当たらせた。ところが、築港のためには、洪水の度に土砂で港を埋めてしまう河川の治水工事を合わせて進めなければならないことを痛感して、河川の抜本的な治水に取り組もうとしたのである。

木曾三川河口付近では、デ・レーケは、明治九年に、四日市の大規模築港のための調査をし、翌年には「四日市港築港計画図」を作成している。高須（現海津市高須）出身の稲葉三右衛門が築いた四日市港の南に造る、というものである。デ・レーケの木曾三川の実地調査は、その直後の明治一二年二月二三日から三月七日であった。

デ・レーケは、木曾三川の实地調査をすると、三川分流に関する意見書である「木曾川概説書」を同一年四月に内務省石井権大書記官に提出した。二週間の調査で的確な意見書を作成して

いる。その後、デ・レーケは補完的な調査を進め、明治改修の全体計画作成を仕上げる。

初代内務卿大久保利通は、明治一〇年西南戦争が終わると、「維新から一〇年間は創業期、それからの一〇年間は、内政を整え、民産を殖する最も大切な時期であり、土木事業に重点を置く」と語っていた、という。その言葉通り政府は、明治一〇年代、県官の建言や意見等を入れながら、治水・治山・築港・灌漑用水開発などに力を入れるようになり、その中に、木曾三川下流改修は組み込まれ、本格化してくる。

県官の建言

明治元年十一月、笠松県は、政府へ「木曾川治水方取斗上申書」を提出し次のような治水建言をしている。

・海口が土砂堆積地の新田化で閉塞しており、大規模な浚渫をすべき。
・美濃国内の藩・県が一国として協力し、さらに、国としてすべき。



視察するデ・レーケ(木曾川下流河川事務所蔵)

・多良高木三家の水行奉行の廃止。

これは、笠松県知事長谷部甚平(忍運、福井藩士出身)の建策という。長谷部は、その後も岐阜県令として、政府と連絡をとり、木曾三川の新たな治水体制の整備に尽力し、小崎利準県参事に引き継いだ。

政府がオランダ人工師を招いたことに勢いを得て、明治一〇年、三重・愛知両県令は連署して、政府へ木曾川治水について、オランダ人工師の派遣と調査を要請した。

地元民の要望活動

地元民は、単独であるいは連名でいくつか要望や建言をしたようであるが次のものは内容が明らかである。

(一)明治六年六月 安八郡土倉村(海津市平田町)浄雲寺高橋示証住職が建白書を政府に提出

(二)明治一二年一月 安八を始め一郡の有力者が連署して美濃国水理改修懇請願書を政府に提出

(一)の高橋示証の建言は、木曾川三〇〇間・長良川二五〇間・揖斐川二五〇間に川幅を拡幅し、且つ海口迄分流すべき、というものであった。さらに、明治八年、高橋は同志八人とともに、元老院へ、木曾川治水について建言している。

(二)は、安八郡四郷村(輪之内町)の有力者片野龍蔵外二七名が連署するもので、外国人工師を派遣して、濃・勢・尾三州にわたる抜本的大水理工事を国において施工してほしい旨の請願であった。この直後の同一一年二月、各輪中の有力者達は、治水改修有志社(治水共同社の前身)を結成し、河川改修の早期実現に向けて運動を開始した。

治水共同社の設立の時期

治水改修有志社が、治水共同社と改称したのはいつかについて、『岐阜県治水史下巻』には、明治一三年四月一日であるかのような記述があるが、同一二年中であつたと見られる。それは明治一三年一月五日付で政府の石井省一郎土木局長から治水共同社宛に、五〇円寄付の意を伝える書簡が出されているからである。それより前年に改称していたからこそ、石井局長はその名称宛に寄付ができたのである。

『治水史下巻』では、デ・レーケが「明治一三年四月一日、三川を分流せしむべき意見書を提出したので、それに即応して、治水改修有志社が治水共同社に改組した」としているが、デ・レーケが木曾川治水についての意見書概要(説書)を提出したのは、明治一一年四月一日であり、そのときはまだ長良川・揖斐



明治元年 美濃国治水建築

川は現状のまま、大量の土砂を流出して河道の底を高くする木曾川のみを分流する意見であった。

治水改修有志社としては、木曾川治水の早期実現と地元の見解の組込みを図って、体制をより強固なものにするため、事務所を岐阜の政治・経済の中心街だった米屋町に置き、掛員選出を輪中・郡の規模にそい合計四〇名ほど割当てた。社では、取締と複数の惣代を選出した。取締は鏡島の大地主上松治郎一や福束輪中代表片野萬右衛門(龍蔵の父)が選ばれた。

治水共同社の社員及び資金募集については、治水改修有志社時代、一町歩に付七円七〇銭出資をしての加入を求めており、それを継承している。片野萬右衛門は、社へ一二〇〇円を醸金した、という。

総工費九七四万円

木曾三川下流改修工費は、当初四三二万円、明治三五年には終了する予定であったが、同四五年迄かから、総工費は九七四万円と巨額に上った。

当時、小学校教員の月給が一〇〇〇円、校長が二〇〇円〜三〇〇円、石井局長の月給は二五〇円ほどだった。工事に働く人達の日当は一日一円と比較的高かった。今の日当が一万五千円〜二万円ほどから換算すると、九七四万円は一五〇〇〇〜二〇〇〇億円となる。

片野萬右衛門の治水共同社への醸金一二〇〇円は一八〇〇〜二四〇〇万円ほど、石井局長の社への寄付五〇円は七五〜一〇〇万円ほどとなる。当時は現在と違い金の使い道の少ない時代であり、その価値は高いものであった。

デ・レーケが宿泊した早川家

治水共同社の高須輪中代表の一人早川周蔵が片野萬右衛門宛に出した四月四日付書簡(片野記念館蔵)によればデ・レーケ人工師は片野萬右衛門家を宿にする筈であったが、同家が法会中ということ、安八郡三郷村(平田町)の早川周蔵家が宿となった。その際、早川家では、片野家から椅子とテーブル掛けを借用している。書簡は、その返却と御礼、それに、二〇日(治水共同)社へ出頭するように通知をもらったが、雨天で欠席した旨が書かれている。



片野萬右衛門肖像(輪之内町 片野記念館蔵)



治水共同社関係書類(輪之内町 片野記念館蔵)



デ・レーケが泊まった早川家(平田町三郷)、右側の建屋に洋間あり

デ・レーケが早川家へ宿泊したのは一日かそれ以前からかであるが、三月のことか四月の一日のことかは不明である。三月とすれば、明治一年三月の木曾三川調査時のことかもしれない。

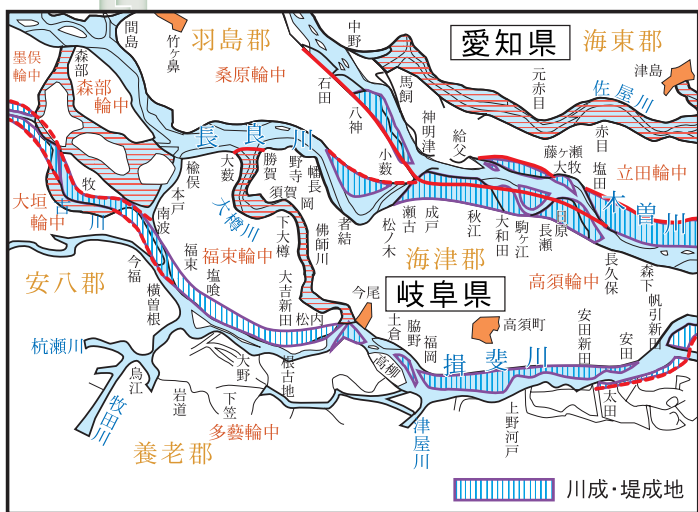
早川家には、現在もデ・レーケが宿泊・居住したという暖炉付洋間が残されている。

川成・堤成地の買収と立退

明治改修は、抜本的な三川分流工事が主体であり、川幅の拡幅のため、揖斐川左岸の福東輪中西部、長良川右岸の高須輪中東部などの流域住民は、移転を余儀なくされた、というより強制された、というべきかもしれない。

この木曾三川の最大の難関は、川成・堤成地にかかる一村あるいはその一部の家の立退を承諾させうるかであった。

国も三県も、地主の承諾、住民の立退承諾に固い決意で臨んだ。全体の約半数は承諾を得たが、半数は土地収用法をかけられ、その審査委員会の裁決に服さない者は提訴した。最後まで抵抗したのは、海津郡吉里村の森川寛衛外六二名であったが、明治三二年五月、



木曾長良揖斐川三川改修計画図(部分)

訴訟費用の一部として二万五千円の支給を受けることを条件に訴訟を取り下げるとしたので、示談が成立し、全ての立退処理が終わることになった。行き詰まっていた立退問題が、一気に解決に向け進展したのは、明治二九年七月と八月の二度にわたる洪水で田畑・家屋の流失等大水害が発生したためであった。村民のかなりの多くが住家がなく食料もない悲惨な状況を呈したので、災害救恤のため、用地買収を急速に実行し、土地調査の方針を全て台帳面をもってすることとした。これは、土地・家屋が流出した住民にとつては、大変な福音となったので、買収は円満に進んだ。

立退者はどこへ移転したか

改修工事は進展し、土地は買収されて、農地が著しく減少し、農業を継続しがなくなった上に、住居の立退きを求められた

農家は、新たな仕事を探さなければならず、困惑し難儀をした。

立退期限は、明治三三年三月



揖斐川右岸堤に沿う列状集落 福東

三日であった。その前三二年、福東村では、揖斐川左岸新堤内側沿いの幅一〇間、七〇〇間の地に住居が建てられるように、捨土をしてほしいと、水谷哲三始め一三九名が連名で嘆願書を出し、聞き届けられた。それによって、福東地方では、揖斐川左岸堤防下に列状集落が現在も見られる。

このように、元の住居や残された田地に近い所に移転した家もあれば、大垣町など外の土地へ転出する家も相次いだ。福東塩喰両村では、明治二二年から同四五年迄に、一一五戸転出しており、その内多いのは、次のようであった。

- 名古屋市 一九戸
- 愛知県 一九戸
- 滋賀県 一六戸

- 大垣町 一五戸
- 養老郡 七戸
- 仁木村 五戸
- 大藪町 四戸
- 東京 四戸
- 北海道 四戸

『揖斐川改修百年誌』掲載表より

農業ばかりやってきた者が急に商業などに商売替えをして失敗し、無一文になっては元も子もない、という心配が多かったが、やはり、移転先の半数は都会・町であった。都市に出て、家族で商工業に従事したり、家族の誰かが会社や役所へ勤めたりするなど新しい生活を切り開くことになった。

とはいえ、転出を余儀なくされた人の中では、故郷をなくし、苦難の道を行く人も少なくなかった。



揖斐川(明治)改修百年の碑
輪之内町福東 白髭神社境内

平成二二年一〇月、福東地区では、「揖斐川改修百年の碑」が建立されたが、それには、「二三〇戸の内一九〇戸が強制移転にかかり、その内四〇戸は県外への転出を余儀なくされた。我々は、その恩恵に浴している」と記している。

光明寺流れ

扶桑町山那^{やな}

むかし、むかしのお話です。
大雨で木曾川があふれだし、
激しい濁流にさらわれて、
山那神社のお社が流されたことがありました。

洪水が治まったある日のこと。

一宮の光明寺の住職が頭痛で床にしていたところ、
住職の枕元に、
見たこともない気高い女性があらわれました。

「川上の山那の里のものだ。」

わたしの化身は流されたままの姿で
この寺の森にある。

馬を用意し、早く里へと返してほしい」
そう言うと女性は姿を消してしまいました。

住職が寺侍といっしょに森を調べてみると、
木の枝に、馬に乗った女性の神像が
見つかりました。

その慈悲深い面持ちは、
枕元に立った女性に瓜ふたつ。

きつと山那神社の神だったのでしょう。
「不思議なことがあるものだなあ」

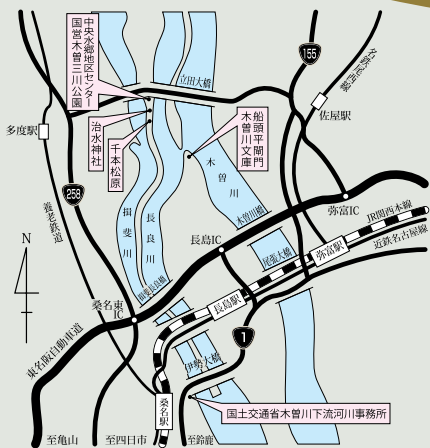
光明寺から知らせを受けた山那の人びとは、
驚きつつも御神体の帰還をよろこびました。

洪水の被害を受けて

仮のお社のままだった山那神社は、
その後しばらくして建てなおされ、
里の人びとの手によって
後世まで厚く祀られました。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496-0947 愛知県
愛西市立田町福原
TEL (0567) 24-6233



●表紙写真● 上:木曾川扶桑緑地公園 下左:木曾川堤防のお駒返の碑 下右:扶桑文化会館

編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成する
コーナーを企画しています。身近でおこった出
来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、愛知県扶桑町の皆様
及び、丸山幸太郎氏にご協力いただきありがと
うございました。お礼申し上げます。

今回は、岐阜県下呂市を特集します。ご期待
ください。

宛先「KISSO」編集係 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>